法蔵寺の歴史（七）

歴代上人のはなし

法蔵寺は現在二十八代目

法蔵寺は、室町時代の開創以来、現在の住職は二十八代目になります。

初代住職は、現在の倉ヶ崎の山中に法蔵寺を建てました。

その後、九代住職は、倉ヶ崎にあった法蔵寺を大桑に移転しました。

十九代住職は、信望が篤く、多くの檀信徒がこのとき法蔵寺にご縁を結んだと伝えられています。また大規模な本堂再建も行いました。

法脈（ほうみゃく）でつなぐ

一般では、親がいて子がいて・・・と代々がつながっていきますが、宗教の世界では確かな伝統を受け継ぐ際には、**法脈（ほうみゃく）**という代のつなぎ方をします。血のつながりで無く、法の繋がりです。

明治時代の廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）

第二十四代住職は、大桑に**「志導舎（塾）」**という教育の場を、法蔵寺に作りました。これが後に「大桑小学校」になりました。大桑には他に、川村医院が開く「川村塾」があり、ともに教育に力を入れました。

この二十四代の時に、法蔵寺は、戊辰戦争の際、土佐藩士の手で焼かれました。

二十五代住職は、明治政府の廃仏毀釈（はいぶつきしゃく＝寺を潰し、神社をふやす）の方針により、廃寺にならざるを得なかった法蔵寺傘下の下寺（したでら）多数を、現在の法蔵寺に統合しました。

法蔵寺は、地域に不可欠の大きな寺だったために、廃寺にはならなかったそうです。

廃仏(イメージ)

全ては心の平安のため

二十七代住職は、それまで下寺の移築でまかなっていた本堂を現在の本堂に再建しました。

そして現在の二十八代住職は、かつての法蔵寺を再建すべく、鐘楼（しょうろう）、客殿、庫裏など境内整備を行いました。

全ては檀信徒の心のより所「仏の教えのある所」をつなぎ、心の平安を提供するため、様々な努力をしてきたのです。

そして時代時代に多くの方々のご協力があって、今日の法蔵寺があるのです。

合掌

手押しの霊柩車　引退

法蔵寺では、平成の初期まで手押しの霊柩車（れいきゅしゃ）を使用していました。しかし近年、葬祭ホールを使用する葬儀が増えるとともに、霊柩車も自動車の時代になりました。そこで、保存してあった手押しの霊柩車に引退頂くことにしました。

みんなの手で押す霊柩車は、近親者の「死」を身近に感じさせ、明日からの「生」を意識させてもらうとても重要な役割を担っていました。

いままでの活躍に深く感謝したいと思います。

お願い

境内墓地　お焚き上げ所

境内墓地内にあるお焚き上げ所に、ビニールや仏花、その他ゴミを置く方がまだいます。

お焚き上げ出来ない燃えない物も、合わせて置かないようお願いします。